

【アーカイブ管理者より：当日投影資料、無断転載禁止】

日本倫理学会ワークショップ 2021年10月1日
東日本大震災から見えて来たこと(九)
——女・子どもの倫理(7):「十年が過ぎた時点で」

原発事故と教育の危機

—ハンナ・アーレントの「教育の危機」から考える—

渡部 純(福島県立福島東高等学校)

1. 問い

原発とは技術的解決の見通しが立たないまま、それによって生じる負債を未来へ先送りし続けることでしか機能しない無責任体系のことである。

そこにおいて先行世代が次世代に負う責任とは何か。その伝達はいかにして可能なのか。このことを教育という観点から考える。

2. 原発事故後における「教育の政治化」とは何か

朝日新聞2011年11月27日<http://www.asahi.com/special/10005/TKY201111210210.html>

福島復興の熱意、世界へ配信 首相も引用の高校生の劇

関連トピックス

野田佳彦 原子力発電所 Youtube



英語字幕付きでネット配信される福島
しま総文の創作劇（実行委員会提供）

合唱や美術など全国の高校の文化部が集まり、8月に福島県で開催された全国高校総合文化祭。開幕式で披露された創作劇「ふくしまからのメッセージ」の英語字幕付き映像が、動画投稿サイト「ユーチューブ」を通じてネット配信されている。

大震災と原発事故に見舞われた高校生たちが、生き方や地域、周囲の人々などについて考えを深め、福島復興への決意を訴える1時間の舞台だ。

「福島に生まれて、福島で育って、福島で働く。福島で結婚して、福島で子どもを産んで、福島で子どもを育てる——」。このせりふは、9月の野田佳彦首相の所信表明演説で引用された。実行委員会が大会直後にネット配信した劇の映像には多くのアクセスがあった。海外にも福島からのメッセージを伝えようと、新たに英語の字幕を付けて10月末から配信を始めた。

せりふの大半は、実行委員会の生徒49人が震災以降に体験し、考え、思いを託したものだ。実行委員長を務めた安積高校3年、遠藤顕雄（あきお）さん（18）は「みんなの、飾らないけれど前向きな言葉をそのまま舞台にしたことで、多くの人に感動してもらえたのではないのでしょうか」と話す。

「ふくしま総文」の公式サイト（<http://www.fukushimasoubun.gr.fks.ed.jp>）から見る事ができる。（渡辺康人）

【アーカイブ管理者より：当日投影資料、無断転載禁止】

福島民友新聞 2018年11月25日

高校球児「五輪に出たい」 バッハIOC会長と福島商3人が懇談

2018年11月25日

いいね! 0

シェア

ツイート



バッハIOC会長（左）と談笑しながらあづま球場に向かう（右から）安齋さん、高橋さん、大内さん＝24日午後、福島市

「五輪に出て、期待に応えたい」。福島県の高校球児が2020年東京五輪の野球・ソフトボール競技が行われる福島市で、国際オリンピック委員会（IOC）のトーマス・バッハ会長に思いを伝えた。バッハ氏は「いつの日か、五輪で日本チームの一員として会えることを楽しみにしている」と激励した。

福島商高野球部の2年生3人が24日、バッハ氏と懇談した。「大震災があったから今の仲間に出会えた。悪いことばかりではなかった」。エースの大内良真さん（16）は主将の高橋尚也さん（17）、捕手の安齋海人さん（17）を見つめながらバッハ氏に打ち明けた。

大内さんは飯舘村出身。草野小3年の時に東日本大震災が起き、栃木県、福島市への避難で1年ほど野球から遠ざかったが、小学5年で転機が訪れた。同村で在籍していたスポーツ少年団の監督から、同市の軟式野球チーム「ふくしまBS」を紹介されて入団。仮設飯舘中に入学後は福島リトルシニアに入り、今のチームメートに出会った。「つらいこともあったが、福島に来て野球を続けられていることに感謝している」



放射線の健康影響

印刷

～ 「風評被害」 について再び、福島の高校生のフランスでの 発表 ～

ツイート

シェア

原発事故の後、残念ながら様々な風評被害が福島県の住民を悩ませてきました。本コラムでもこれまで放射線・放射能に対する不安を払しょくし、風評被害を乗り越えるためにはどうしたらいいか、私なりに真剣に考えてきました（[1](#)、[2](#)）。風評被害のひとつに、放射線と健康に関するものがあります。今回も、このことについて考えてみたいと思います。

私たちは、世界中どこにいても、大地、建物、植物、そして大気、という身の回りの環境すべてに存在している放射線から被ばくしています。いいかえれば、全ての人々が放射線源に取り囲まれて生活しています。加えて、全ての人々の体内には、約4,000ベクレルの放射線カリウムを含む約7,000ベクレルの放射性物質が存在しています。ホールボディカウンターを使えば、体内に存在する放射線量を簡単に測定できます。放射線の無い世界は、どこを探してもありませんし、人間の体も放射線源のひとつです。

https://www.kantei.go.jp/saigai/senmonka_g81.html

福島第1原発事故 処理水「安全性知って」 経産省、新地高で出前授業

／福島

[暮らし・学び・医療](#) | [学び・教育・入試](#) | [福島](#)

毎日新聞 | 2021/6/17 地方版 | 有料記事 | 884文字

毎日新聞
2021年
7月26日



処理水の海洋放出について福島第1原発のジオラマを使って高校生に説明する経済産業省の木野正登氏（左奥）＝福島県新地町小川の県立新地高校で2021年6月14日、尾崎修二撮影

政府が2年後に海洋放出する方針を決めた東京電力福島第1原発事故の処理水について知ってもらおうと、経済産業省が14日、新地町の県立新地高校で「出前授業」を開いた。高校生や大学生への出張講義は4月の方針決定後初めて。

課題研究などに取り組む選択科目の一環として実施され、3年生15人が参加した。同省資源エネルギー庁の現地事務所（富岡町）所属の木野正登廃炉・汚染水・処理水対策官が第1原発のジオラマを使い、廃炉や処理水の現状を解説した。汚染処理水に含まれる放射性物質のうちトリチウムだけは除去が難しいことや、国の基準を下回る濃度で薄めて水に流せば、住民が受ける追加の被ばく量は、自然界から受ける放射線の影響の10万分の1未満に抑えられることなどを説明。生徒からの

質問にも答えた。

【アーカイブ管理者より：当日投影資料、無断転載禁止】

福島民報 2021年7月26日

原発処理水の現状など探る 福島県郡山市の安積高校で国際放射線防護ワークショップ

2021/07/26 22:04



福島県郡山市の安積高は26日、東京電力福島第一原発で増え続ける放射性物質トリチウムを含むんだ処理水に関する学習会を同校で開いた。

福島県復興の現状を学び発信する「国際放射線防護ワークショップ」の一環。経済産業省資源エネルギー庁の木野正登廃炉・汚染水・処理水対策官が講師となった。第一原発の廃炉作業の進捗(しんちよく)状況、処理水発生の要因、トリチウムの性質などを解説した。処理水を海洋放出する政府方針なども説明した。



処理水の現状や処分に向けた課題などを学ぶ生徒

生徒からは「処理水処分に伴う風評を防ぐための情報発信に力を入れるべき」「処理水海洋放出方針決定までに長時間を要している。溶融核燃料(デブリ)の最終処分にはさらに時間がかかると思うので、今から検討すべき」などの意見が出された。

「科学的に正しく理解すれば不安や風評は 払しょくされる」という論理

経産省エネルギー庁・木野正登：

「処理水の安全性について知らない人が多い。少しでも疑問を解消してもらい理解を広げたい」と説明する。県外での実施も「本来なら全国を飛び回ってやりたい。経産省には『文部科学省と連携して全国の学校でも同様の取り組みをしてほしい』と提案している」

（前掲，福島民報記事より）

放射線と福島の実況を学ぶ教育モデルについて
福島県立安積高等学校 教諭 原 尚志
(日本原子力学会誌, Vol.62, No.8 (2020))

事故後 9 年経過してもなお消えない風評に、どう対応したら良いのか。そもそも風評は放射線への不安以外の何者でもなく、その本質的な対策は放射線について学ぶことを抜きには語れない。先に掲げた「後年影響」や「遺伝影響」についても、問いかけるだけでなくそれに対する学びの場を設けなければ、風評を払拭できないのではないか。風評払拭こそ福島復興の大きな課題である。この課題を乗り越えていくためにも、まず高校生に対する、放射線と福島の実況に関する教育を充実させる必要がある。

【アーカイブ管理者より：当日投影資料、無断転載禁止】

安積高校教諭 千葉惇

「福島への復興と放射線についての教育モデルの研究」

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/431189.pdf>

現在は放射線量が県外や諸外国と同じ程度まで減ったこと、
事故直後であっても自然放射線量程度の被ばくであったこと、
福島県に暮らす人が放射線を浴びたことによる遺伝的影響は生じえないであろうこと等

「以上の情報は毎年全国の学校で配布されている文部科学省の放射線副読本に全て記載されている」

福島民報新聞2021年8月30日

高校生語り部育成

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の記憶と教訓を継承するため、県教委は今年度、県立高の生徒を語り部として育成する。発生から十年が経過し、人々の関心が薄れるなど「風化」が懸念される中、未曾有の出来事を忘れず、今後の社会に生かすには若い担い手の育成が重要だ。県内のできるだけ多くの高校生に参加を促したい。

高校生語り部育成

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の記憶と教訓を継承するため、県教委は今年度、県立高の生徒を語り部として育成する。発生から十年が経過し、人々の関心が薄れるなど「風化」が懸念される中、未曾有の出来事を忘れず、今後の社会に生かすには若い担い手の育成が重要だ。県内のできるだけ多くの高校生に参加を促したい。

震災の記憶継承を

避難生活を続けている。復興や廃炉の長い道のりを考えれば、いかに風化に防止めをかけるかは重要課題の一つだ。今の高校生は自らの被災体験を記録に残すことができる最後の世代だろう。これまで県内では一部の高校が震災と原発事故について学び発信してきた。交流会の開催を予定しているが、生徒が学んだことを発信、共有する機会を可能な限り設けるべきだ。被災や避難の状況は地域ごとに異なる。自分たちの地域の被害を記録し、復興の歩みを振り返るだけでなく、他の地域の現状と課題を知ること、かつ

説

福島民報社が二月に実施した双葉郡八町村の住民に対する意識調査では「記憶の風化は進んでいるか」との質問に対し、「進んでいる」との回答が七割超に上った。風化を感じている住民が多い現状が浮き彫りとなった。現在も三万四千人超の県民が県内外で

論

てきた。県教委は県内全域の三十校程度を対象に九月から語り部事業を本格化させる。総合的な探究の時間などを活用し、県内で活動する語り部の話を聞くほか、双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館での研修を予定している。県教委は伝承館で高校生に

てない複合災害の全体像をとらえることができるだろう。今も県内に残る農林水産業や観光業への風評の問題を考え、さっかきにもなるはずだ。会津地方の学校であれば、この機会に震災と同じ年の七月に甚大な被害をもたらした新潟・福島豪雨について学ぶべきだ。

べきだろう。全国各地で大雨や地震の被害が頻発する中、十年前の教訓を広く共有することは防災に役立ち、命を守る行動につながる。

体験の継承は被災地に共通する課題だ。一九九五（平成七年）の阪神大震災から二十六年が経過した兵庫県には震災を経験していない高校生も若い世代を対象に、震災伝承活動などの費用を助成する制度がある。兵庫や岩手、宮城の名県の高校生とも交流する機会をつくれれば、活動の参考になる。高校生には自分の言葉で古里の現状を伝えられる大人になってほしい。風化との長い闘いを見据え、県教委は来年度以降も事業を継続すべきだ。

（斎藤 靖）

一ノ瀬正樹「『である』論を侵襲する『べき』観」の論理

- ①原発事故による放射線被曝は危険である「べき」だという立場が、いまでは健康に影響するほどの放射線量ではなかった「である」としての事実以上に強調する言説として広がった。
- ②①の結果、「福島に住み続ける方々」は心ない非難を受ける羽目に陥り、ひいては、「無理な避難」のなかで健康や経済、教育、夫婦関係に問題が生じ、自死に至るケースまで引き起こしてしまった。
- ③もし、福島原発事故の放射線被ばくは健康に影響の出ない程度であったという「事実」を、「後知恵でも」受け入れていれば、「しあわせ」が奪われる割合はそれほど大きくならなかつたはずである。
- ④「放射線の危険性を強調した方々には、道徳的な意味で（本来なら刑法的にさえ問うべきでしょう）、強く自己批判を求めたいと思います」

一ノ瀬正樹「『である』論を侵襲する『べき』観～放射線被曝をめぐる混乱の源泉～」、池田香代子・開沼博他『しあわせになるための「福島差別」論』、かもがわ出版、2017年、参照。

3. 科学の道德化と政治化

- ・なぜ、事実認識から幸福の価値や道徳的刑法的な批判を導き出せるのか？

- ・そもそも被ばくをめぐる評価は「科学的事実」が確定したと言えるのか？

cf; 「倫理的な傷」は「事実」の積み重ねでは癒えない
(拙稿「失われた宝を名づけること」, 「現代思想」2021年3月号)

4. 子どもが政治に晒されることの問題と大人の責任 ——アーレント「教育の危機」——

「どの子どもにもある新しく革命的なもののために、教育は保守的でなければならない」

・「子どもは妨げられることなく成熟するために、安全な隠れ場所を本性上必要とするのである」

・「この新しいもの〔子ども〕が現にある世界に照らしてその真価を発揮できるように配慮されねばならない。〔…〕、この場合教育者は、若者に対して世界〔…〕を代表する立場にある。〔…〕教育において、世界へのこの責任は権威の形式をとる。〔…〕子どもと相対する場合、教師は大人の全住民全体の代表者であるかの如く、子どもに事細かに指示し、語るのである。これがわれわれの世界だ、と」

5. 教育の条件としての権威とは何か

- ・ イデアという真理の強制の試み（プラトン）と科学

cf; 西村肇「科学者から見た水俣病研究」（「環」25号，2006年）

「科学者とは意見の違いでの論争を好まない人種だということです」

- ・ 権威とは、人々が自由を保持する服従である（アーレント）

「権威auctoritasという言葉は、増加させるaugereという動詞に由来する。権威あるいは権威ある者が絶えず増加させたのは、創設にほかならない」（アーレント「権威とは何か」）

「第二の敗戦」としての原発事故 ——権威の喪失と創設のチャンス——

cf;会津電力・佐藤弥右衛門

「なぜ原発に依存してきたのか。気づけば、会津の水源は只見川も猪苗代湖の水も尾瀬も東電に奪われていた。猪苗代湖の水が山手線を回したといわれた時期もあったが、東京は水も人も奪っていく。

「カネがあれば」ではなく、「自分たちの資源を取り返せば」という思考へ切り替えれば10割自治は可能になるのに、福島県は「自分たちでやるのだ」という意見をもって動かなかったことがいかに情けなかったことか。国がやってくれるといつまでも自分たちで動こうとしない。もはや国はどうでもいい。会津が独立し、会津が国連へ加盟しよう！もはや、誰かが革命を起こさなければいけないんじゃないか」

「第13回エチカ福島・まとめ」（※エチカ福島は〈3.11〉以後の福島を考える対話活動である）
<https://blog.goo.ne.jp/cafelogos2017/e/2b0544413b97197259777b5583364c37>

6. 子どもの成長と「隠れる」ことの意味 ——ガイア水俣・高倉草児・鼓子の「転回」経験——

「裁判や交渉などで父がメディアに取り上げられ、テレビに出てくるんですけど、何で父が出てるのかわからないのと、水俣病にかかわっていることをあまり友達に知られたくないので、次の日に学校で友達から「お父さん出てたね」と言われても、「へえ～」と流していました。あまり自分も深く知ろうと思わなかったですし、恥ずかしいと思っていました。父が水俣病にかかわっている人として出ることが嫌でした」（鼓子）

「親父は逆に自分がやっていることを伝える気があまりなかった」
(草児)

(2019年8月、エチカ福島「公害事件と世代間伝達——水俣事件を第二世代はどのように考えてきたのか」・まとめより)

「自分が話すと偏るからと言われました。被害者の立場に立って、裁判も一緒に闘っている人間の言葉を子どもに聞かせると間違いなく自分の方に寄ってしまうから、そうではなくて自分で学んで判断してほしかった」（鼓子）

「でも、「闘う人」というのは滲み出てましたけどね。親父に電話がかかってきた時のことです。最初親父も礼儀正しいのですが、いきなり「もう知らん！」と言ってガンと電話を切って、「塩まいとけ！」と言うんです。激しいんです。だから、この人は闘っているんだというのは、言わなくてもわかる。

中井久夫 「「伝える」ことと「伝わる」こと」

- ・ ある自主避難者の公的領域と私的領域のはざまで生じた葛藤
- ・ ある語り部の負い目…「僕も語り部にならなければいけないの」

⇒ 親として格闘する姿を垣間見た子どもは、大人が世界に対してなにがしかを果たそうとしている責任を感受し、そこに新しく始められる何かを胚胎する

結語

大人が闘えばよい。

その政治的経験にこそ次世代へ伝えるべき言葉が宿る。

子どもは公的領域と私的領域の闘から世界への責任を感受する。

そこに世代間伝達の可能性が生まれる。

語られるべき政治的な経験抜きに科学的言説だけが支配してしまうところにこそ、教育の危機はある

【参考】

- 一ノ瀬正樹「『である』論を侵襲する『べき』観～放射線被曝をめぐる混乱の源泉～」、池田香代子・開沼博他『しあわせになるための「福島差別」論』、かもがわ出版、2017年。
- 拙稿「失われた宝を名づけること」, 「現代思想」3月号所収, 青土社, 2021年。
- アーレント『過去と未来の間——政治思想への8試論』, 引田隆也・齋藤純一訳, みすず書房, 1996年。
- 千葉惇「福島の復興と放射線についての教育モデルの研究～本県と他県それぞれの知識・意識の調査を根拠として～」,
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/431189.pdf>
- 西村肇「科学者から見た水俣病研究」, 「環」25号、藤原書店, 2006年。
- エチカ福島報告「〈電力〉から考えるもう一つの生き方」, 「公害事件と世代間伝達——水俣事件を第二世代はどのように考えてきたのか」。引用は言論カフェ・カフェロゴのブログより。<https://blog.goo.ne.jp/cafelogos2017/>
- 中井久夫コレクション『「伝える」ことと「伝わる」こと』, ちくま学芸文庫, 2019年。